

## 栃木県小山の地形と土地利用

吉田 仁子

栃木県南部に位置する小山市を *field* として選び、向々田町、美田村合併（昭和38年4月18日）以前の行政区画による小山市を調査の対象とした。

小山市は東京から80.6 Km、東北本線を利用して1時間20分の所にあり、人口34969人、面積4425 Km<sup>2</sup>である。東京を中心とする首都圏内にあつて、鉄道の分岐点、市中を国道4号線、50号線が四通する交通の要衝を占め、将来の発展が予想されている。首都圏整備計画に基づく市街地開発地域の指定を受け、工場誘致により徐々に工業化が進んでいる。米麦中心の農業は、都市化の影響を受けて、今転換期にあつている。

小山の地形は、大別すると、市街地のある洪積台地と、その西側の沖積平野に分けられる。この台地は、西に思川、東は鬼怒川によつて挟まれた南北に細長い台地のノ部分で、ほぼ平坦で、北から南に緩傾斜している。台地は5~10mの砂礫層からなつており、前時代の鬼怒川や思川の堆積物が、第四紀後半の海退により隆起したものと考えられる。砂礫層にはほぼ整合的に3~4mのローム層がつている。このローム層の特徴は、間に40~50cmの淡黄色~橙色の塵沼パミスバンドを挟んでいることである。

パミスの供給源はその分布から赤城火山と推定されている。この台地面は塵沼パミスが南関東の東京パミスの上位にあることが認められたことにより、武蔵野面に対比され、また北関東の至木面に対比される。土壌は、火山灰性の軽鬆な適壌土がほとんどである。なお、台地面には、比高2~3mのごく浅い樹枝状の谷が発達してその谷にはロームはない。沖積平野は現在の思川によつて出来たもので、地表下30cm前後に礫層があり、直接表土は被わられていて、ロームは存在しない。土壌は適壌土又は瘠土が大部分である。調査地域を地形分類によつて次の5つに分けた。

- |           |           |
|-----------|-----------|
| (1) 洪積台地面 | (5) 沖積平野面 |
| (2) 谷底平野面 | (6) 自然堤防  |
| (3) 緩斜面   | (7) 旧河床   |
| (4) 急斜面   | (8) 現河床   |

気候は、内陸県にあるが、県南の海拔30~40mの平地にあるため、温和である。年降水量は少く約1390mmで、夏期にその過半が集中し、冬期乾燥する。7,8月には雷雨の発生が多く、畑作物を害す。冬から春先の北西季節風は、ロームの土壌を飛散させることがある。

農業土地利用をみると、地形を反映して経営耕地の67%が畑、30%が水田で、畑作中心の農業地域といえる。主な農作物は水稲、陸稲、小麦、ビール麦、甘藷それにかんぴょうである。

小山は江戸時代には、宿場町、市場町として栄え、明治時代の中頃になつて鉄道が所通し交通の要地となつてからは、周辺農村の地方中心都市として発展してきた。オ2次世界大戦後、工業の大都市集中から、地方分散の傾向が強くなつてくると、小山は東隣の大谷村と合併し、市制をひいた。(昭和29年4月)そして種々の有利な工業立地条件(自然条件、社会条件)を有することから、積極的な工場誘置運動をくり広げ、その結果富士通信機や昭和アルミをはじめとする大小40余の工場が誘置された。

これらの工場立地に伴う都市化の影響を受けて、人口は周辺町村では減少しているのに対し、次第に増加し、産業構造の高度化がみられる。即ち、産業別人口割をみると、1960年にオ1次産業32.5%、オ2次産業27.5%であるが、5年前の1955年と比較すると、オ1次産業は9.5%の減少、オ2次産業は6.7%の増加を示しているのである。

農林的土地利用が減少し、工場地や住宅地等の都市的土地利用が増加しつつあるが、それは特に小山駅東部の畑地帯に著しく現れている。

農業に於ては耕地の減少が多くなつてはいるが、ノ戸平均ノ町子反という比較的広い耕地面積を持ち(内地平均は子反)、依然として労働生産性の低い小麦中心の農業を行つてはいる。専業農家を除いて一般農家は、栽培技術、資金、企業的精神の欠如 *etc* により、かんぴょう以外には仲々商品作物栽培に踏みきれずはいる。しかし就労の機会が多く与えられたことにより、専業農家は減少し、兼業農家が非常に増加している。

小山では現金収入を得ようとする農家の動きは、およそ次の2つのタイプにわかれる。

- 1 商品の野菜、果樹栽培、畜産を行う農家。
- 2 農閑期に、世帯主や長男までが季節労働者となつて出稼に出る農家。

以上のように都市化の影響を受けて、小山の農業は今大きな転換期にたたされている。

将来小山は工業衛星都市にまで発展するものと予想されるから、経営の合理化をはかり、商品の野菜、果樹、養豚、養鶏、酪農等を経営内に取り入れた集約的、多角的な都市近郊農業に向うのが適當と思われる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
*field* を近くに選びながら、*field work* が十分でなかつたり、調査の

焦点が不明確であつたりして、現状把握さえも十分に出来ず、本論に値するものにあらなかつた事を、大変痛く思っている。

## 群馬県富岡市の地形と土地利用

吉田 寿子

この報告は、調査地として群馬県富岡市を選び、この地域を地形と土地利用の点から考察し、その上で地域の性格を把握することを最終目的としたものである。「土地利用」の考察にあつては、調査地が養蚕県群馬の中でも特に養蚕が盛んな地であるので、桑園(→養蚕)を中心とした農業土地利用の考察に重点をおいた。

富岡市は群馬県の北西部、東京から直線距離で100km余りのところに位置している。長野県と群馬県をむすぶ重要な通路の一つ、中仙道の裏街道筋にあり、古くはここを通過して流入する文明の恩恵を受けていた土地である。

関東山地の北縁部にあり、地形は鑛川の河岸段丘を中心として、丘陵地から山地を含むが、市の中心部は河岸段丘上にある。このため土地の性質は、一般に高燥となっている。市の産業構成をみると、農業人口が50%をこえ農業が中心となつてはいるが、最近では金属機械類の生産を行う工場の進出が目立ち、従来からある製糸業に加え、工業のweightも高くなつてきている。

地形は特に段丘地帯の地形分類を行つたが、段丘面は上、中、下位の三面に分けられた。この分類は、結果的には今迄この地域について行われた土地分類調査(地形分類)などの研究成果と変るところはなかつた。この段丘面のうち、上位、中位面には関東ロームが被覆している。ロームは板鼻かつ色パミスを下層に上層ロームと、その下には中部ロームと思われるものと認められた。post-loam 段丘面である下位面には微地形が認められ、旧自然堤防や砂礫堆などの相対的に高く、表層が粗粒質な部分と、旧河道、旧後背湿地の部分が区別できた。これらのわずかな地形の違いは、土地利用に反映され、相対的に低い部分は水田に利用されていることが多い。

土地利用からみると、農業土地利用が土地利用の首位を占める。耕地のうちでは水田は29%とかなり少なく、畑地利用、特にその中で桑園利用の割合(総耕地の37%)が高いのが特徴である。桑の栽培を基礎においた養蚕業はこの地域の農業の中心になつており、農家経済上で非常に重要な位置を占めている。

この地域の養蚕業は非常に古い伝統を持ち、すでに江戸時代中期より農業